教職課程広報誌

教職課程センターだより 第１４号

発行日　2015年11月24日

大学の専門学校化に抗うことはできるか？

教職課程センター長　山本敏郎

学生たちが「大学」を「学校」と呼んでいる。教育実習の話をしているとき、実習校も大学も「学校」と言うので、どっちのことを言っているのかわからないことがある。たしかに大学も学校教育法に存在根拠をもつ学校のひとつだが、それでも大学はschoolとは異なるユニヴァーシティ(university)である。DP/CP/APを定めよとか、シラバスにDPに即した学習目標を書けとか、アクティヴラーニングやルーブリック評価をやれとか、教育の内容と方法への国の介入は凄まじい。制度的に大学はschoolにされようとしている。

これと呼応するかのように、学生たちは自分たちを「学生」と呼ばず「生徒」と呼ぶ。学生だけではなく、大学の教職員も「生徒」と呼んでいる。さらに学生はわたしたちを「山本T」などと呼ぶ。Tとはteacherのことだろう。学生たちはわたしたちを教授（professor）としてではなく先生（teacher）と見ているということだ。近頃では、とうとう大学の教師でさえも、自分たちや同僚を「〇〇T」などと呼んでいるようだ。大学は内側からもschoolにされようとしている。

きっとこの人たちは、学ぶとは知識を身につけることとしか思っていないのではないか。学生（生徒）は知識の受容器（パブロ・フレイレ）であって、知を創造する人とは見ていないのではないか。大学の先生とは、高校教師よりはいくらか難しいことを教える人くらいにしか思っていないのではないか。ついでにいえば、大学は小中高の教員の「天下り先」程度にしか考えられてはいないのではないか。だから、小中高での教師と子どもとの間にある垂直的で権威的な関係が、大学でも再現されているのではないか。「試験に出すぞ」とか、「単位を出さないぞ」とか、そう脅さないと（もっとも当人たちは脅しているつもりはではなくて、そういう言葉かけがすでに習慣化されているのかもしれない……としたらそれも大問題だが）、学習意欲を喚起できないようだ。

これにたいしては、大学においてこそ、教授と学生との間に強烈な垂直的で権威的な関係があるのではないかという指摘もあるだろう。わたしはそれを否定しない。そういう体験もしてきた。しかしその一方で、「若い教授陣と学生が同じ目線で一緒に研究する自由闊達さにあふれていた」（益川名大特別教授）と言われてきたノーベル賞受賞者を多数輩出している研究室もある。学問の前では（どういう問いを立てるかの前では）、教授も学生も、先輩も後輩も平等だというのである。また、同様の考え方から、教授が自分のことを「先生」と呼ばせず「さん」づけで呼ばせている研究室があることも知っている。垂直的で権威的な関係ではないところで、優れた学問的な成果が出ている例である。

わたしは教育方法論の講義で、元愛教大の折出教授の知見を借用して、学びとは「知る」「問う」「確かめる」の３つの側面ないしはステップからなると説明する。学生たちはこれまでは「知る」で止まっていて「問う」ということをしたことがないと異口同音に言う。「問う」「確かめる」を体験したくてわたしのゼミを選ぶ学生も多い。「問う」こと抜きに学問はできない。現実が正義に悖ることがあれば、そのおかしさを「問い」、そうした現実を説明したり変えていく指針を提供できない既存の知を「問い」、新しい知の創造に向けて仮説を立てて、その確かさを「確かめる」。

学問とは「問う」ことを「学ぶ」ことなのである。

岐阜・神奈川県で大量合格、仲間と共に栄冠！

－　2016 年度教員採用試験（2015 年実施）の結果について　－

今年の教員採用試験の合格者（延べ人数・補欠を含む）は、現役生 30 名、卒業生 13 名の計 43 名となりました。合格者減少の要因は、本学教職課程履修者数が大きく減少して教採受験の母集団が縮小したことです。その結果、現役学生の一次合格者数（昨年 66 名→53 名）・二次合格者数（昨年 37 名→30 名）ともに減となりました。

内訳は、初等教育専修 13 名、中等（中学・高校）教職課程の学部学科が 17 名です。初等教育専修は、昨年と比較すると学生数の減少に伴い合格者数が減少しましたが、合格率は上がりました。これに対して心理臨床学科の合格者数は昨年の 7 名から 12 名へと増加しています。全体的には母集団が減ったなか、その健闘ぶりが光ります。また、経済学部から久々の合格者がでたことも嬉しいニュースです。

卒業生は、一次合格の報告数が 22 件と昨年（33 件）と比べて大きく減少し、最終的に 13 名が合格しました。内訳は初等教育専修 5 名、心理臨床学科 6 名、社会福祉学部 2 名です。

自治体別にみると、愛知県 11 名（補欠 2 名を含む）、岐阜県 7 名、神奈川県 6 名、静岡県 4 名、長野県 3 名、石川県 3 名、千葉県 2 名、名古屋市 1 名など全国 13 の自治体に合格しています。

今年度の教員採用試験の特徴は、受験する母集団が大幅に減少したことです。この影響は初等教育専修にもっとも顕著に表れました。

第二に、全体の合格者数は減少しましたが、合格率は初等・中等ともに上がり、複数の自治体を合格する学生が増えるなど、受験学生の実力が向上したことです。

第三に、特別支援学校教員をめざす受験者の多くが、倍率が高く難関の中学社会での受験を避けて、専門の特支を活かすことができる自治体を受験したことです。その結果、岐阜県・神奈川県の受験者が増加し、両県での大量合格に繋がりました。本学の特色を活かした受験法として注目されます。

第四に、残念なことに愛知県の合格者が半減しました。学生の試験評価結果をみると、筆記よりも面接・集団討論など口述試験の結果が合否判定に大きな比重を占めることが、より鮮明になりました。口述試験が B 判定以上でなければ合格できません。二次試験の重要性を確認するとともに、今後の二次対策の在り方を再検討することが必要です。

最後に、昨年の初等教育専修、今年の心理臨床学科の実績から、教採は団体戦であり、チームワークが重要だということです。教友ゼミを中心とする自主的な学び合い、励まし合い、支え合う仲間としての意識・結束力が教採結果に大きく影響するということです。また、栄冠を勝ち取った学生たちの多くは、教友ゼミなど自主ゼミに取り組み、サークル活動や学校支援ボランティア活動などにも積極的に参加して、現場経験や社会的経験を積み重ね、個性や教育観・子ども観を磨いた学生たちです。

後に続く教職志望のみなさん、先輩の合格体験や失敗に学び、受験の重圧や困難に挫けず、仲間と支え励まし合いながら、教師への夢を実現するために挑戦してください。先輩たちの実績が示すように、努力は必ず報われます。努力は惜しまないことです！（文責：高須）

教員採用試験２次対策講座を受講して

子ども発達学部 心理臨床学科 4年 黒木 瞳

お盆の最中の8月13日、教員採用試験の2次対策講座が半田雁宿ホールで行われました。この日のために愛知県の他、神奈川県や京都府からも現役教員の先輩方が来てくださり、2次試験に向けての心構えや対策のポイント、教訓などを教えて頂きました。また、午後からは分科会に分かれ、集団討議や模擬授業など本番を意識した緊張感のある実技練習が行われました。細かいところまでご指摘をしてくださり、2次試験に向けて取り組むべき課題を見つけることができました。

私自身この講座を受けたことで、「合格したい」という気持ちがより一層高まり、集中力を切らさずに2次試験を迎えることができたように思います。この講座を終えた後、「みんなで合格したいな」という声が聞こえてきました。本当にその通りだと思いました。勝負事なので手にする結果は合格、不合格様々だと思います。しかし、私にとって同じ志をもつ仲間たちと学び合い励まし合う環境があったということが、結果以上に大切なことではないかなと思いました。教員採用試験に向けて仲間たちと頑張ってきたこの1年は大学生活の中で一番楽しく、充実したように思います。そして、幸い私は岐阜県、神奈川県に合格することができました。これから私たちが先生や先輩からたくさんのことを教えて頂いたように、私たちも教師を志す後輩たちに学んだことを伝えていきたいと思います。1年前、「教員採用試験は個人の闘いでしょ」と思っていた私ですが、1年後「仲間がいて良かった」「みんなで合格したい」と思えるようになっていました。そのような思いを、教員採用試験を通じて後輩のみなさんにも体験していってもらいたいと思います。

合格体験記　愛知県（小学校）

子ども発達学部 子ども発達学科 初等教育専修 4年 今西良伸

私は静岡県と愛知県の小学校を受験し、愛知県で内定をいただくことができました。CDP 講座を受講していましたが、私が本格的に試験勉強を開始した時期は４年生になってからです。元々受験勉強というものが嫌いな私は教友ゼミにも参加せず、とてもスロースタートでした。

■ 筆記試験対策

効率よく勉強しようと思い、専門試験の方は生協で購入した協同出版のテキストで第一志望の愛知県の過去問のみを解きました。あまり科目を絞らず、全てまんべんなく取れるようにしました。教職・一般教養の方は CDP 講座で購入した、全国の過去問が分野や科目ごとに分けられた問題集のみを解きました。愛知県の対策しかしていませんでしたので、案の定、静岡県は一次試験で落ちました。受験する自治体をいくつか併願して受験することも良いことだと思いますが、その分対策する分量が多くなるので、私としては多くても２つの自治体までにした方がいいと思います。実質使用した教材は２冊です。小論文の対策は、５月の模試と８月の二次試験対策講座の２回対策を行いました。小論文は苦手でしたので、教育評論家のような上から目線の内容や書き方にならないようにだけ気を付けました。

■ 口述試験対策

愛知県は口述試験として一次試験に集団面接、二次試験に集団討論と個人面接があります。私は人前で話すことはそこまで苦手ではなかったこともあり、口述試験の模擬練習は一度も行いませんでした。それでも口述試験がうまくいった理由を自分なりに分析してみると、周りは講師を経験し受験されている方も多いので、授業の仕方や教材研究だとか、そういう所の話はできないし、したとしても負けてしまうと思ったので、大学生にしか出せない強みを出していこうと考えました。ボランティアサークルや海外研修、教職インターンシップや教育実習、塾講師アルバイトなどで学んだことなどを中心に面接官に訴えかけました。面接ノートを作ろうともしましたが、私の場合は数ページ書いただけで終わってしまいました。ただやはり、周りが面接練習をしている中で、自分はしていないということに焦りはありました。面接練習を行う意義は、練習で考えていたことを本番で話せるように…というよりかは焦らず落ち着いて臨めるように…というところに私はあると思います。面接練習はやった方が確実にいいです。それから笑顔はかなりの武器になるなと強く思いました。

■ 最後に

ここまで私の体験を書きましたが、あまり周りと取り組み方が違うので参考になるかどうかわかりませんが、私は自分のペースで対策を進められることが一番だと思います。それから塾講師でのアルバイト経験がすごく試験で活かされたと思っています。普段から勉強を教えているので、筆記試験の方はそこまで困りませんでした。大切にしてほしいことは、試験合格がゴールではないということです。試験対策ばかりで視野が狭くならないように、ボランティアやサークルなど積極的に参加し、本来目指すべき方向を見失わないようにしてほしいと思います。

合格体験記　岐阜県・神奈川県（特別支援学校）

子ども発達学部 心理臨床学科 4年 林哲平

筆記（マーク）試験対策

私は三年生の 12 月頃から採用試験に向けて勉強を始めました。最初に取り組んだのが筆記試験対策です。筆記は大体一般教養、教職教養、専門教養に分かれています。私はまず教職教養から勉強を始めました。教職教養は大学から学ぶものなので高校までの蓄積で差が出る一般教養よりも、勉強した分だけ確実に点数につながると思います。教職教養の勉強で使ったのが CDP 講座のテキスト、過去問、図書館にある問題集です。間違えたところは色分けをし、ノートのようにまとめるように書いて覚えました。間違えた所を二度間違えないように解説をしっかりと読み、何度も反復することで条文が頭に入ってきます。このやり方は専門教養も同じです。私は教職教養の次に春休みから専門教養をやり始めました。これも大学から学ぶことなので勉強した分だけ点数に結びつきます。専門教養で使ったテキストは過去問、協同出版の県別参考書です。まず県別参考書で大事な基礎や重要な条文等を覚え、過去問を繰り返し解いて覚えていきます。教職教養も専門教養の過去問も岐阜・神奈川共に二回は繰り返してやりました。一般教養は過去問のみで勉強しました。私は数学が苦手だったので数学はあまり手を付けず残りの科目で点数を取れるようにしました。しかし、専門・教職に比べ勉強にあてた時間は少なく、とにかく専門と教職で８割以上取ることを目標に勉強しました。

小論文、面接（個人・集団）、集団討議・討論

面接練習に関しては、教友ゼミに毎回参加し、先生方や仲間からの助言を聞く中で面接力を鍛えていきました。個人面接・集団面接共に必ず聞かれる志望動機等の項目はノートに書き出したうえで、答えることができるよう練習しました。面接では、何よりも人柄やその人の表現力等を見ているため、何度も仲間同士で練習し、自分の形を築いていくことが大切だと思います。堂々と自信を持ちながらも謙虚に答えるようにするといいと思います。集団討議・討論においても教友ゼミでお題を出し合って試験官と受験者役を交互に行い、互いのグループを指摘し合いました。また私は、岐阜県の教員採用対策講座にも参加し、実際に現場で働く講師の先生や現職の先生方と共に月に一度面接、集団討論・討議の練習をしました。他にも愛知県の教員採用学習交流講座「しゃちほ講座」にも参加し、本番を想定した練習をする中で、緊張感や自らの課題を知ることができました。小論文に関しては、4 年生になってから山口先生の開く小論講座や実際に山口先生に個人的に見てもらい練習をしました。小論文はもちろん、面接でも筆記の勉強で得た知識が生かせるので、筆記の勉強の積み重ねが大事だと思います。

精神面について

最後に、精神面について述べたいと思います。教員採用試験の勉強は三年生の冬頃から、実習をはさみ四年生の夏まで続くとても長い戦いです。私も何度も気が抜けそうになりました。特に四年の夏頃には周りの就活生はどんどん内定をもらい取り残された感じになります。しかし、そんな時は一緒に頑張っている仲間と将来の教員生活について熱く語り合い、モチベーションを上げるといいと思います。私は、連日、学校の図書館で昼頃から夜の 10 時まで友達と勉強していました。ここまでできたのはその友達や教友ゼミの仲間のおかげだと思います。一人では続けることが難しいことであれば、仲間と共に頑張って下さい。私がそうであったように、バイトも恋愛も遊びもやめる必要はありません。ただ常に必ず合格してやるという強い気持ちと、教員になった時の自分の姿をイメージし頭から離さないことです。

合格体験記　滋賀県（特別支援学校）

経済学部 経済学科 4年 竹原昇平

この度、私は滋賀県の特別支援学校教諭として教員採用試験に合格することができました。経済学部で特別支援学校の免許がとれるのは私の代まででということで、最後を有終の美で飾ることができたと思います。しかし、勝因は何であったか考えてみると明確なものは思いつくことができません。試験の対策ができていたかといえば、結果、全く手応えを感じることができていませんでしたし、むしろ不合格だと思って公務員（市役所の採用）に応募もしていました。ですが、この文章が教師を目指して勉強をしている人、これから教師を目指そうと思っている人の少しでも参考になればと思っています。

まずは情報収集についてです。私は、滋賀県と神奈川県の教員採用試験を受けました。神奈川県は大学推薦で受けてさせていただいたことから一次試験が免除となっており合格することがあれば神奈川県の方だと思っていました。結果は上記の通り、滋賀県に合格することができました。試験方法は様々なものがあり、大学推薦もそうですが特定の資格を持っていることで有利になることもあります。私は滋賀県において身体障害者特別選考で試験を受けており、一次試験の一部免除と一般教養・教職教養が課題作文に置きかわりました。実際に一次試験においては専門科目である特別支援教育に関することしか勉強はしていません。まずは、各自治体で実施される具体的な試験方法について情報を得ることは勉強以上に大切なことだと思います。

また、中学校社会科・高校学校公民科等ではなく、特別支援学校教諭の選考を受けたことは大きかったと思います。経済学部は中学校免許であれば社会科の免許しか取れません。しかし、中学校社会科免許は多くの大学で取得が可能であることから教採の倍率が他の教科に比べて高いことが一般的です。そのため、生半可な勉強では現役での合格は厳しいかもしれません。本当に教員採用試験に合格したいと思っているなら、高倍率を突破できるよう勉強を重ねるか、通信制大学等で他教科の免許を取得するのも一つの手段だと思います。

次に二次試験についてです。私はCDP講座の二次試験対策講座を受講する予定でしたが、残念ながら受講生が集まらず閉講になってしまいました。二次試験は模擬授業や面接など一人で対策することができないことから、ゼミの先生や教職課程センターの先生にお願いして練習をしました。実際の面接では、弱い部分を見せることができる人は一方でそれだけ強い心の持っている表れであるとも解して、私自身が障害を持っていることも含め、自身もつ長所だけでなく弱みについても前面に出すようにして臨みました。試験の対策は必要ですが、マニュアルのみに頼るのではなく、自分の言葉でありのままを伝えることも大切だと思います。

最後に大学生のうちにしておいたほうがいいことについてです。

教員免許は大学の講義に出席し試験を受け合格できれば誰でも取得することができます。大切なのはそれ以外の時間です。私は家で本ばかり読んでいたので、知識は身につきましたが実際に体験するという機会が乏しかったです。サークル活動やボランティア活動、バイトなど経験の幅を広げて様々なものに興味・関心を抱いて欲しいと思います。私もそうですが教師になることは通過点であって、そこからがスタートです。過ぎた時間は戻ってこないので後悔のないように、陰ながら皆様方のご活躍を心より御祈りしております。

合格体験記 名古屋市（特別支援学校）

社会福祉学部 社会福祉学科 4年 神野仁志

私は、名古屋市の特別支援学校に合格しました。教員採用試験の勉強をはじめたのは 10 月頃でしたが、なかなか勉強に身が入らず時間だけが過ぎていきました。本格的に取り組み始めたのが 12 月でした。これが後に焦る原因になりました。最初は、取り組みやすい教職教養からはじめるのが良いと先輩や先生に言われていましたが、私はスタートするのがみんなより遅かったので教職教養と専門教養の日、一般教養と専門教養の日と交互に勉強を行いました。専門教養と教職教養は一冊にまとめてある問題集を選び２周行いました。一般教養はＣＤＰ講座で使っていた問題集や一冊にまとめてある問題集から、自分が受験する自治体の傾向を調べてピックアップした箇所を重点的に行いました。また、教職に関する月刊冊子を購入して今年の全国的な傾向やどの範囲が出やすいかなどを調べて進めていきました。その月刊冊子と連動する YouTube での解説があったので文章だけでわかりにくいところも理解することができました。これは、おすすめです。小論文の対策は４月から始めました。小論文対策にもっとも力を入れたのではないかと思っています。小論文対策は、私が採用試験対策で一番お世話になった先生の研究室に行き、指導をして頂きました。最初の方は私一人だったのですが、採用試験が近づく頃には数人同時に指導して頂きました。数人で行うことで、お互いに意見を出し合うこと、指摘し合うことができるので一人よりも充実した学習をすることができたのではないかと思います。教友ゼミでは、面接の練習を行いました。先生が考えてきたテーマや自分たちが調べてきたテーマをもとに主に集団討論や集団討議を行いました。これ以外の時間にも仲の良い友達と集まって、友達の下宿で面接練習を行いました。自分が受験する自治体の過去問対策もこの時期から始め、３周ほど行いました。この頃は、勉強を始めるのが遅かった分のツケが来て時間が足りず焦っていました。さらに教育実習が追い打ちをかけてきました。採用試験までのスケジュールを逆算していなかった自分が悔やまれました。時間が無さ過ぎたことから、スマホのアプリで過去問を購入して、電車に乗っている時や寝る前にも取り組むようにしました。採用試験までの残り三か月間は本当に毎日がバタバタしていて、一日が２４時間ではなく４８時間であればいいと何度も思いました。２次試験の対策は、面接だけだったので面接ノートを作って何回も復唱して暗記し、どんな質問が来てもいいように準備をしました。さらに、自分が受験する自治体で過去に合格した先輩と連絡を取ってアドバイスを頂きました。

卒業生からのたより

2012 年度 子ども発達学部 子ども発達学科 初等教育専修 卒業　大谷千尋

卒業後は講師として，特別支援学校中学部の級外と小学校の特別支援学級の担任として働きました。現在は初任となり金沢市内の小学校で３年生の担任をしています。まだ教員３年目ですが，これまで感じてきたことをお話させていただきます。

戸惑いの毎日

今年度，私は初めて通常学級をもちました。「初任者，まずは学級経営やね・・・」と言われますが，何から始めたらいいのかと戸惑う毎日でした。１日を過ごすことで精一杯，案外大切な教室の整理整頓もままなりません。子ども同士のトラブルや保護者の方への連絡に追われる日々，ご家庭へ足を運んで謝罪をすることも多々ありました。２学期になり，少しずつ自分の学級経営の方法を振り返る余裕が出てきたなあと思います。研修や他の先生から学んだことを取り入れています。教室の整理整頓に心を配れていることも，自分なりの成長かなと感じています。それでも，落ち着いて自分の仕事を行えるのは勤務時間が終わってからです。授業の進め方，子どもとの関わり方を周囲の先生方にアドバイスをもらって考えています。授業が上手くいかないことに合わせて子どもたちが騒ぎ始める，騒ぐ子どもたちへの対応方法がわからない。そんな私を見て，指導教員の先生は「大丈夫。焦るな。」「子どもは敵ではない。」という言葉を掛けてくれました。「思うようにいかないのは当たり前。理屈では上手くいかないよ。だって「人の心が相手」だから」と。子どものことで悩むけれど，教師は子どもの小さな変化や成長にたくさん励まされるのだと。「教師っていいぞ。」と，戸惑う私を励ましてくれます。

子どもに教わり･励まされる

子どもたちの言葉や行動に学び，励まされています。１学期，クラスのある男の子との関わりに試行錯誤しました。思いを上手く言葉で伝えることが苦手で，様々な行動で伝えてくれます。その思いにじっくりと耳を傾ける余裕がなく，その子どもにたくさん辛い思いをさせてしまいました。しかし，その思いを聞きたいと自分なりに働きかけることを続けました。その子の行動をきっかけに，クラスに問いかけてみんなで考える時間も取りました。ある日，その男の子が給食準備中に泣いていました。泣いている理由を一緒に係活動をしていた子どもに問うと，きっとこういう理由で泣いたと思うと，その子の気持ちを考えてくれました。その予想は当たっていました。友だちが考えてくれていたことがわかると，男の子もその後の活動にすんなりと参加することができました。その男の子が困っていることを子どもたちから教わり，次の関わり方を考えるきっかけとなりました。

保護者との関わり

保護者の方との関わりが重要だと，特別支援教育の中で教わりました。保護者の方々と連絡を密にすることで子どもたちがより良い方向に向かうことができ，子どもたちとの関わり方のヒントをもらうことができます。通常学級でももっと関係を密にしたいですが，それができない今はとてももどかしい気持ちです。

先輩の先生方に教わる

３年生は全部で５クラスです。学年の先生の数が多いことで，１つの事柄に対して多様な対応や解決策が出るプラス面があります。クラスの実態と自分自身に合った方法を選びます。わからないことは，すぐ先生方に尋ねます。働く中で，一人で悩んでいても解決の光は見えないことに気付いたからです。どんなに忙しくても，耳を傾けてアドバイスをしてくれる先生はいます。私の指導教員はよくこの言葉を掛けてくれます。「何とかなる」，「なるようにしかならない」と。何度もこの言葉に励まされました。「完璧」はないからこそ，better な方向を選んでいこうと思います。そんな先生方への感謝を忘れず，今後も多くの技術を学んでいきます。

今の目標は「笑顔」です。笑顔で子どもたちと関われる毎日にできるように頑張ります。

特別支援学校の教師になって

2014 年度 子ども発達学部 心理臨床学科 卒業　小田梨詠

私は現在、愛知県立名古屋特別支援学校で働いています。特別支援学校で働くようになってから早いもので半年が経過しました。特別支援学校の教師になることは、小学生の頃からの夢であり、卒業アルバムにも記してありました。実際に働いてみて、毎日が研修でてんやわんやではありますがとても充実した日々を送っています。私の働いている名古屋特別支援学校は、肢体不自由の学校です。大学時代の講義で習った「経管栄養や痰の吸引」などの医療的ケアが毎日行われています。そのため、学校には看護師が常駐し、それらのケアをしてくださいます。医療的ケアのことは、大学時代に習っていたし、どのようなことをするかも把握していたつもりですが、初めて目の当たりにしたときは、「あっ、教科書で習ったやつだ！」と感動するのと同時に、自分が本当に特別支援学校の教師になったことを実感しました。さらに特別支援学校は、送り迎えなどで保護者と顔を合わせて会話をする機会が毎日あります。そのため、教師間での連携に加えて、看護師や保護者との情報交換がとても大切だと実感しています。

日本福祉大学に在学中に講義で脳性まひや筋ジストロフィーなどさまざまな障害名や特徴について勉強しました。しかし、私が名古屋特別支援学校で出会った生徒たちは、同じ脳性まひの生徒でも一人一人の実態が本当に違い、驚きました。講義で学んだ知識だけでは補えないような経験を毎日させていただいています。その中で、生徒一人一人に合った指導や教材を作れるように、日々奮闘しています。さらに、生徒の日々変わっていく実態を把握できるように、家庭での様子などを教師間で引き継ぎながら、互いに支援方法を工夫し、それらを踏まえた指導が行えるようにしています。

さらに、私の中では、教育課程に沿った授業を受ける生徒の指導は、通常中学校の教育実習での授業を想像していました。しかし私の受けもった生徒たちは、文字を書くスピードや理解度がばらばらな生徒たちでした。みんなが同じくらいのスピードで板書を写し終えることができるように、ワークシートを用意したり、プリントが滑らないように書見台を固定したり生徒たちが授業に集中して取り組めるように工夫をしています。自分が関わった生徒で、その生徒が授業を受けやすいような工夫を一番に発見し、他の授業でもそれを取り入れているのを見るととても嬉しく感じます。

特別支援学校の教師になって半年、すべてのことがまだまだ模索の日々ですが、何よりも今の生活が楽しいです。これからも、生徒の特性を理解してそれに応じた指導が進められるように周囲のアドバイスを受けながら成長の支援に携わっていきたいです。

教育実習で学んだこと 小学校

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修 ３年 鈴木麻友

私は教育実習で言葉による伝え方の難しさを学んだ。授業をする際に、子どもたちにその時間で何を習得させたいのか明確であったが、私の言葉がけ次第でその目標は達成できないこともあった。４５分という決められた時間の中で、何をどのように伝えたら子どもたちが理解できるのかわからず苦戦した。子どもたちの反応は正直であるため、わかっているときとわからないときの様子がはっきりとわかった。理解しているときは安心して落ち着いて授業をすることができたが、理解していない様子を見ると私も動揺してしまい、本当に伝えたいことを伝えきれずに終わってしまうこともあった。子どもたちは教師のことを信頼しているため、ついて来ようとする。だからこそ教師がうろたえている様子を見せてしまうと子どもたちにも伝染してしまうのだと感じた。また授業を考えていく中で、特定の一日だけを考えるのではなくてその前後の授業の流れも一緒に計画をしていくことが必要であると感じた。授業だけではなく、子どもたちと向き合っていく中で一人ひとりにしっかりと向き合うことの大切さも学んだ。授業に真面目に取り組まずノートも開こうとしなかった児童に、毎日声掛けを欠かさないことで少しずつ勉強に向き合うようにもなり、自分から問題を考えるようになった。わからない問題は質問に来たり問題が解決できたときは、できたよと言いに来てくれたりした。児童自ら勉強に向き合うようになってくれたことが嬉しく、毎日の声かけが無駄ではなかったと感じた。しかし、児童と接していく中で一人という児童に真剣に向き合うことも大事だが、広い視野をもって接していくことが大切だと感じた。小学校という現場で学べたことを今後の大学生活に生かしていくことが今後の課題であると思う。

教育実習で学んだこと 小学校

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修 ３年 市川直樹

教育実習の４週間は、私を大きく成長させてくれました。大学の講義のみでは得られない貴重な経験をし、教師の良さについて学びました。特に学べたのは研究授業のときです。

私は５年生の社会科の授業を行いました。授業を何回か行っていく中で、45 分の授業を考え、進めていくことは非常に難しいと痛感しました。子どもたちに何を学ばせたいか、どう学ばせるのか、ではそのためにはどう働きかけたら良いのか。言葉のかけ方や発問、板書の仕方等、いざ子どもたちの前に立って授業をするとなると簡単にはいかず、日頃の先生方の授業の仕方や工夫に、ただただ凄さを感じました。

しかし、子どもたちの目はいつも真剣でした。実習生である私に対しても、真面目に取り組んでくれる子どもたちに何度も助けられました。そして「わかった」や「できた」と学びを深める子どもたちの姿を見ることができたとき、何にも代えられない喜びを感じました。この喜びこそ、教師の良さだと思いました。研究授業が終わったとき、何人かの子どもたちが「先生の授業、とてもわかりやすかったよ」と言ってくれました。私は教師という職業を志して本当に良かったと感じました。

実習最終日、子どもたちと別れるとき「先生目指して頑張ってね」と声をかけてくれる児童が何人もいました。思わず涙が出そうになりました。たった４週間でしたが、充実した４週間であったと言えます。実習で学んだことを糧に、更に学んでいきたいと思います。

教育実習を終えて 高等学校

経済学部 経済学科 4年 岡部友梨枝

私は母校の高等学校で2週間の実習をさせていただきました。

教務の先生が私の指導教諭をしてくださり、実習内容のご指導だけではなく、教師のあり方も座学形式で教えていただきました。

母校である実習校は、全日制中心の私立校ですが、何かしらの事情を抱えた生徒が多く集まる学校です。悩みを抱えている生徒たちが、他の学校よりも多いのが特徴です。当時の私も実習校の生徒たちと同様、悩みを抱えた生徒でした。卒業生ということを自己紹介で話したことで、私は生徒に限りなく近い存在であることが伝わったようで、生徒たちから歩み寄ってくれて、たくさん話をしました。相談に乗ることもありました。何人かの相談を受けた内容は、偶然にも私も経験したり、感じたことのあることばかりでした。生徒たちの気持ちが痛いほどわかりました。私は生徒たちに、「私が経験したときには、こうだったんだ。だから、あくまでも私の個人的な意見なんだけどね。その時私はこうしてみたの。」といったように、自身の経験であくまでも個人的な考えであることを伝えてから、私の考えや、今後どうしたらいいのか話しました。一般論は話しませんでした。当時の私含め、実習校の生徒たちは、その一般論と自分の心のギャップに苛まれてしまうものなのです。だから敢えて個人的な意見しか話しませんでした。そこから新しい考え方を生徒たち自身で見いだせるからです。

生徒たちはすぐに私に親しみを持ってくれて、生徒たちからいっぱい声をかけてもらいました。忙しい顧問の先生の代わりに部活動にも参加させてもらうこともできました。軽音楽部に参加して、ギターを中心に生徒と楽しんできました。

研究授業において私は、講義スタイルの授業でも、生徒たちが授業時間を楽しいと思えることに重点を置いて考えました。ジェスチャーやアクションを大きくして、生徒たちに話を振るようにホワイトボードの前を沢山動き回ったり、生徒たちの意見をさらに他の生徒たちの意見に絡めて、笑いの起こるような授業を作ることができました。そうできたのは、担当の先生が前の時間1コマ分、私と生徒の交流の時間に充ててくださったことがあったからです。担当の先生は、生徒から私への質問タイムにしてくださり、1 コマ質問攻めに遭いました。すごくプライベートな質問まで飛び交ったのですが、私は全力を以って答えました。そこで生徒たちとの距離が縮まり、研究授業にも生徒たちが協力してくれて、楽しい授業にできたのです。

指導教諭の先生からは、私が何故実習校出身なのか話をして、生徒との交流の経過と状況を報告した際に、私の進む道が開けるようなことを話してくださいました。私の経験を理解してくださり、生徒たちとの接し方を評価してくださり、「あなたなら、その経験を精神論ではなく、提言できる。そのために心理学を大学院で勉強して、学者になるのもどうか。」と言葉をいただきました。私は、自分のような思いをする生徒たちを一人でも救っていきたいと思ってきたので、指導教諭の先生の言葉がとても力になりました。

教育実習に行って、特別な経験をさせてもらえたように思います。2 週間、大変だなと思ったこともありました。でも、行けてよかったと思うことの方が多いです。

母校での実習は、他の高等学校で実習するのとはまた違った経験ができたのではないかと思います。生徒たちにたくさん助けてもらったおかげで授業のあり方を考えることができ、経験を生かしたアドバイスをする機会を与えてもらいました。指導教諭の先生には新たな展望を発見させてもらい、実習校の先生方に、温かいご指導をいただきました。恵まれた環境で教育実習をさせてもらえて、自分の中で、「どのような教師になりたいか」ということを改めて確立できたように思います。

教育実習体験 特別支援学校

子ども発達学部 心理臨床学科 4年 早川妃佳李

特別支援学校は今まで1日のみのボランティアという形でしか体験したことがなく、2週間という長いようで短い教育実習は本当にたくさんのことを知り、たくさんのことを吸収する機会となりました。

まずは「子ども理解」です。私は高等部3年生のクラスでした。私のクラスは比較的落ち着いていてコミュニケーションが取れる子が多く在籍していました。日々を過ごすなかで会話も多く、徐々に距離が近づいていきました。ですが、研究授業のとき、大きな失敗をしてしまいました。「この子なら大丈夫」「できるであろう」と思っていたことが、その生徒にとっては難しく、なかなか参加することができなかったことです。私はその生徒の「困難」を理解できていないまま研究授業を進めてしまっていました。本来ならば、次の授業への課題となりますが、2週間という短い期間だったので次に生かすことができず、悔しい思いをしました。このことから、子どもたちの隠れた「困難」に気付く「子ども理解」が大切だと学びました。

次に教員同士のコミュニケーションです。子どもたちに合った教材・教具を作成するためにも、教員同士の相談は欠かせません。教員同士の関係を密にし、子どもたちの状態・状況を知る必要があり、情報共有を大切にし、教員全員で子どもたちを支援・指導していく環境づくりが大切だと感じました。先生方は少しの時間があると隣の席の教員と談笑していらっしゃいました。その話が子どもたちのことや授業のこととは関係のないことでもです。そのようなフランクな関係から先生同士も徐々に信頼関係を作っていくのだと感じました。

他には、高等部の作業学習の厳しさを感じました。高等部2・3年生の作業学習を見学させてもらいましたが、「報告・連絡・相談」をどこの部でも大事にしていて、それが守れないようだときつく叱っていました。そのような光景を見るたびに、やるせない気持ちになりました。高等特別支援学校の作業学習は見学したことはありますが、特別支援学校の作業学習を見学するは初めてだったので色々と衝撃があり、考えさせられることが多くありました。

実際に授業を行ってみての体験では、授業の流れ・進行、身振り手振り、声の大きさ、抑揚、言葉遣いなど実際に教壇に立たないと経験できないような多くのテクニックを学びました。子どもたちに合わせて、先生が授業を再構築する臨機応変さ、一人に支援しているときに周りを見る視野や気持ちの余裕など様々な実践力が試されました。当たり前ですが、私はまだまだだと感じています。そして、何よりも毎日の子どもたちの笑顔に元気を貰い、もっと深く関わっていきたいとと強く感じました。教員採用試験は二次試験で不合格でしたが、この先講師として教育実習で学んだことを最大限に生かすとともに、何事にも向上心を持って教師の道へ邁進していきたいと思っています。

教育実習体験 中学校

子ども発達学部 心理臨床学科 4年 牛田凌平

私は母校である岐阜県の中学校で教育実習を行った。教育実習の三週間は心の底から「楽しい」と感じながら毎日通うことができた。実習が始まる直前まではあまりの緊張でとても長く感じていたが、今振り返ってみるとそれまでのどの三週間より早く感じたのではないかと思うくらいに一瞬の出来事であったかのように感じる。私が実習を行った中学校は日ごろの先生方のご指導のおかげでどのクラスも授業中の私語、居眠りはほとんどなく、また挙手発言も大変積極的な中学校だった。私は一年生の地理の授業と三年生の道徳の授業をさせていただいたが、その際も例外ではなく、私からの発問や問い掛け一つ一つにしっかり反応してくれた。自分の言葉に生徒が反応してくれたときは本当に嬉しく、授業を行うことに夢中になってしまい、つい時間を忘れてしまったこともあった。逆に私の発問や問い掛けに対して生徒が表情を歪ませたときには自分の責任を感じ、よく反省もした。反省を積み重ね、熱意をもって取り組んだ授業に対して生徒は必ず応えてくれる。そして応えてくれる生徒がいたからこそ三週間努力することができた。学校は教師のためにあるのではなく生徒のためにあり、あくまで生徒が主体であるということを身をもって知ることができた教育実習だった。中学校教育実習は私にとってかけがえのない思い出である。私のことを「先生」と笑顔で呼んでくれた生徒の顔は一生忘れることはないだろう。教育実習を通して、「必ず教員になる」という気持ちを今まで以上に高めることができたことが私の教育実習の中での一番の成果であったと感じる。

今 後 の 予 定

■ **2年生・3年生 対象**

教職課程履修学生の集い－教員採用試験合格体験発表会

12月17日（木）13：30～16：30　1511教室（美浜キャンパス15号館1階）

■ **1年生 対象**

教職課程オリエンテーション

3月28日（月）4・5限

教職課程登録期間

3月下旬を予定

※教職課程登録を希望する学生は11月の教職課程オリエンテーションに参加した後、3月の教職課程オリエンテーションにも必ず参加した後に、課程履修費の納入及び課程登録を行ってください。